

## 4. 2年保育5歳児 I 児

中田 幸江

### I 児について

本園に入園するまでは保育園に通っていた。4歳児から本園に通い始め、4歳時には同じ保育園に通っていた B 児と連れだって遊ぶ姿が見られた。例えば、赤土山ではどろどろになりながら赤土の感触を楽しみ、互いに顔を見合わせながらおもしろさを感じているようだった。その反面、二人一緒にいることによって気持ちが大きくなり、周りの友達に不快な思いをさせるようなことを言ったり、時にはたたいたり、蹴ったりすることもあった。

5歳児になって I 児は仲良しだった B 児と違うクラスになった。新しいクラスで自分の居場所をつくろう、友達に認めてもらおうと一生懸命に努力していた。苦手だった着替えや身の回りの整頓などをきちんとしたり、牛乳タイムでは友達の反応を確かめながらおもしろいことを言ったりする姿が見られた。しかし、友達は「おもしろいな」と感じているものの I 児自身が望んでいる自信にはつながっていないようである。それは相変わらず、集団活動になった時に友達の反応を気にしながら、ひょうきんなことを言ったり、したりする姿からも伺える。I 児が遊びの中で友達から認められ、自信をもって生活できるように援助していきたい。

事例1 「先生、明日も応援してくれる？」

6月14日(木)

I 児はサッカーのユニフォームを着て、登園した。いつもと違って、なかなか着替えようとしない。

教師 「I 児くん、着替えないの？」

I 児 「……、着替えたくない」

教師 「かっこいい服だからね。今日はこの服を着てサッカーをしたいの？」

I 児 (うなづく)

教師 「わかった。今日はサッカーをがんばるのね」

I 児はうなずいて、外へかけていった。

教師 「I 児くん、がんばれ！！」

I 児がつまらなそうな表情や遊びの場から離れたような表情を見せると教師は応援した。すると、I 児はサッカーボールを目指して、走るスピードをあげた。

遊びの時間が終わると、I児がケヤキステージで応援していた教師に近づいてきた。

教師 「I児くん、今日はずっとサッカーをがんばったね」

I児 「うん。先生、明日も応援してくれる？」

教師 「もちろん」

I児は満足そうな表情で着替えに保育室へ入っていった。

## (1) I児の自己表現のあり方

### ○したい遊びに加わるための表現

I児はサッカー遊びに興味をもっているにもかかわらず、製作をして遊びの時間を過ごしていた。それは、自分から「サッカー遊びにまぜて」と言えないことに起因している。これまでに何度か友達にサッカー遊びをしたいということを伝えてきたのだが、断られたことが度重なり、自分の思いを伝えることが嫌になってしまったのだろう。しかし、本事例ではサッカー遊びをしたいという自分の思いをサッカーのユニフォームに託して登園してきたと思われる。また、このユニフォームを着たことで、「今日こそは自分の思いを伝えよう」と覚悟が決まったのではないかと考える。

### ○遊び続けるための表現

遊び終わったI児にサッカー遊びを続けたことを認めると、「うん。先生、明日も応援してくれる？」と言葉が返ってきた。この表現からI児は、遊んでいる自分を見続けてくれる教師の存在を必要としていることが感じられた。I児は遊びが続かないことが多く、それを自分自身でも感じとっている。友達と揉めることがあったり、思ったように遊ぶことができなかつたりすると遊ぶ意欲がみるみるうちに低下することが多い。それを自らの力だけで克服することは難しく、身近な教師が応援することで気持ちを支えようとしている。

## (2) I児の社会的側面の学んだこと

### ○安心感

I児は教師が見ていると自分の思いを友達に伝えたり、遊び続けたりすることができた。この経験によって、教師は自分の思いを汲み取ってくれたり、支えてくれたりする存在であることに気づき、自分を受け入れてもらえる安心感を得たと思われる。

### (3) 今後に向けて

本事例のようにI児は遊ぶきっかけが掴めなかったり、遊びが続かないことが多い。また、母親が幼稚園で仕事をしている時にはべったりくっついて甘え、遊びだせないでいる。したいと思う遊びに没頭し、遊び続けていくために、I児には自分の存在が受け入れられているという体験とともにそれによって得られる安心感をくりかえし味わうことが必要だと考える。また、自分の思いを率直に伝えられる仲間関係を築いていくことも大切だと考える。

事例2-① 「みんな、呼んでくる！」

7月10日(火)

朝のつどいで、C児の「アメンボのえさを探すのを手伝っていませんか」というよびかけをきっかけにアメンボのえさ探しが始まった。I児、D児、E児、C児4人が月刊誌に付いていた図鑑でアメンボのえさは何だろうか調べていた。

C児 「いやだ、いやだ！」(泣きながら)

I児 「(アメンボを) 逃がしたほうがいいよ」

4人がアメンボのえさを探すという目的で遊び始めたばかりなのに、アメンボを逃がすという言葉が聞こえたため近寄っていった。I児は「逃がしたほうがいい」の一点張り。D児、F児はI児の両側に座り、E児はC児の隣に座っている。

教師 「どうしてアメンボを逃がしたらいいと思うの？I児くん」

I児 「えさが見つからないから」

F児 「そうなんだよね。えさが見つからないとアメンボが死んじゃうよ」

しかし、E児は何か言いたそうだ。

教師 「E児君はアメンボを逃がしたらいいと思う？」

E児 「僕は・・・C児ちゃんがかわいそうだから逃がさない方がいいと思う」

教師 「C児ちゃんが、せっかく捕まえたアメンボだもんね」

C児 「そう！昨日プールに入っている時、一生懸命に捕まえたの」

教師 「D児くんはどうしたらいいと思う？」

しばらく沈黙が続く。

D児 「やっぱり、逃がした方がいい。えさが見つからないから」

教師 「アメンボのえさは何なの？」

I児 「わからない」

教師 「なーんだ。自分達もっている図鑑にはアメンボのえさが書かれていないのね。プレイルームの図鑑は調べてみたの？他の保育室の本は？」

その言葉を聞いてみんながプレイルームや他の保育室に散らばっていった。教師はI児と共にプレイルームへ行った。E児、D児、C児がすみれ組、さくら組の本には、えさについて書かれたものがなかったと言って戻ってきた。I児はたくさんの図鑑や本を順番に調べていき、最後の1冊でえさについて書かれた箇所を見つけた。

I児 「あった！！ね、ここ」

教師に言いながら見せる。

教師 「ほんと、よくこんな小さなところを見つけたね」

I児 「みんな、呼んでくる！」と言いながら走り出した。

教師 「I児ちゃーん、みんなうさぎ組にいると思うよーー」

4人が勢いよく走ってプレイルームへ戻ってきた。

I児 「ほら、ここ。生きている蚊やはえを食べるって」

教師 「こんなにたくさんの本や図鑑をI児ちゃんが調べたんだよね。そしてやっと小さな所に書いてあるのを見つけたんだよね」

E児 「すごーーーい」

I児はとてもうれしそうだった。

教師 「でも、蚊やハエが幼稚園で見つかるかな」

I児 「僕、ハエいるところ知っているよ」

自信をもって走り出したI児にC児、D児、E児が続いて走っていった。

I児、D児、E児、C児の4人が虫とりあみを片手にハエを捕まえようとしている。しかし、虫とりあみの長さが十分ではなく、テラス天井を飛んでいるハエになかなか届かない。

教師 「なかなか捕まらないね」

E児 「もっと長い虫とりあみはないの？」

教師 「残念。これより長い虫とりあみは幼稚園にないわ」

それを聞いていた C 児が虫とりあみを置いて、保育室に入っていった。そして大型積み木を一人で抱えてきた。

教師 「C 児ちゃん、いいこと考えたね」

C 児がやっていることにみんなが注目し、E 児、D 児らも大型積み木を運ぶことに協力しだした。積み木を運び終え、かわるがわる積み木の上に登ってハエを捕まえようと虫とりあみをふっている。まわりで見ていた B 児までもがハエを捕まえることに参加した。

教師 「もうちょっとで捕まえられそう、B 児ちゃん」

なかなか捕まえられない。B 児はあきらめてその場を去っていった。しかし、I 児はずっと粘り強く、虫とりあみをふっている。

E 児 「I 児、まかせたよ！」

頼りにされた I 児はその言葉を聞きながら、虫とりあみをふり続けた。E 児は I 児がふっている虫とりあみをじっと見ていた。

### (1) I 児の自己表現のあり方

#### ○自分の考えを友達に納得させるための表現

事例 2-①のように話し合いではみんなが自分の思いを話せるような場を保障することによって、I 児は教師を仲立ちとしながら自分の思いを表現できるようになってきている。ま

た、この場ではD児、F児と同じようにアメンボを逃がしたほうが良いと主張し、その根拠も同じだったことから自信をもって、「逃がした方がよい」と言葉にすることができたと考えられる。

### ○自分の思いを押さえ込むための表現

I児はE児に「I児、まかせたよ」と頼りにされたにもかかわらず、いっさい表情を変えず、虫とりあみをふり続けていた。このように友達から頼られると、たいていは嬉しさで頬がゆるむはずである。しかし、I児は素直に頼られた嬉しさを表現することができない。これまで自分の思いを押さえ込んでしまうような体験が多かったのではないかと思う。

### (2) I児の社会的側面の学んだこと

#### ○友達に認められるうれしさ

I児は年長児になり、教師のみならず、友達の評価をととても気にするようになってきている。だからこそ、友達に認められたことがI児の本当の自信につながると感じている。事例2-①でE児が「すごーーい」と根気強く図鑑を調べたI児を評価している。自分たちには全く見つけられなかったことをI児はちゃんと見つけたこと、しかも一人で何冊も図鑑や本を調べたということに対する賞賛の気持ちが表現されている。I児自身も夢中になって調べたからこそE児の言葉は単に嬉しいという気持ちだけでなく、自分に対する手応えを感じたのではないかと思う。

事例2-②ではE児が「I児、まかせたよ！」と声をかけている。事例2-①でE児はI児が頼りになることを知って、このような言葉をかけたのだろう。I児にとって、自分の力が友達から認められたという思いを抱くことになったと思われる。

物事をまかせられることは、必ず責任が伴う。したがってI児はE児に虫とりをまかせられ、自分の責任を果たさなければと思ったのではないか考える。

### (3) 今後に向けて

事例2-②でI児はE児の「I児、まかせたよ！」の言葉に対して、「わかった！」や「まかせとけ」と言った反応を示していないことがカンファレンスで話題となった。たいてい幼児は仲間に頼りにされると「まかせて！」と返事をしたり、うれしそうな表情をしたりするのである。しかし、I児はちがっていた。この行動をどうとらえればよいのか、様々なとらえが考えられた。例えば、大人に囲まれて生活しているI児は大人から評価されることにしか関心がないのではないか、I児がつくったもの（視覚的にとらえられるもの）を評価してもらう経験を積み重ねてきたため虫を取ることにこだわっていたのではないかといったことが話し合われた。

この後、ポーターの指導員の方にI児へのかかわり方について助言をうけた。I児は友

達とのやりとりの中で認められているにもかかわらず、それに対する反応が弱いと同時に友達を認めるようなことも少ないということであった。したがって、コミュニケーションスキルとして、友達に認めてもらったらどのような反応をすることが好ましいのか、反対に友達を認めるような言葉かけなどを学ぶことが必要であるという助言をもらった。今後、この点に気を配りながら I 児を援助していきたい。

事例3 「おれ、どこ入れればいい」

10月19日(金)

M児、R児、J児、E児、D児、F児がリレーのチーム分けを相談していた。つき組前のテラスから様子を見守っていると、男の子チームと女の子チームに分かれることに決まった。それぞれのチームの1走者はJ児、E児である。I児が砂場のあたりからその様子を見つめている。

D児 「よーい。どん」

D児のかけ声でスタートした。J児がリードしており、M児にバトンを渡した。その後、E児はD児にバトンを渡した。依然、女の子のチームがリードしていたが、ケヤキステージをまわったところでM児がD児に追い越された。

教師 「M児ちゃん、がんばれ！」

砂場の方を見ると、I児と目があつた。園庭に出て、R児と一緒にM児を応援した。F児、R児の順にバトンが渡り、最初にF児がゴールした。D児が素早く審判の位置に立ち、バトンをF児、そしてR児から受け取った。

次のチーム分けを考えようとみんなが丸くなって座った時に、I児はケヤキステージまで移動してきており、座ってこちら話を聞いていた。

M児 「私、やっぱりやめてもいい？レストランに行きたいし」

すぐには、だれも答えない。しかし、E児が何か言いたそうだ。

E児 「・・・でも、また人数が足りなくなるよ」

J児 「だれかが2回走ればいいんじゃない」

教師 「だからJ児ちゃんは、M児ちゃんがやめてもいいと思っているのね」

J児 「うん」

I 児は教師と向き合うように座り、話し合っているみんなを見ている。

教師 「他のお友達はどう思ってるのかな」

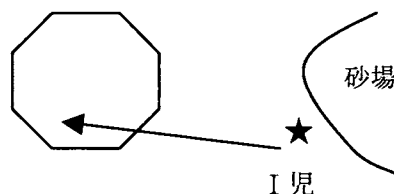
F 児 「それだったらいい」

R 児 「R 児もいいよ」

J 児 「E 児くん、いい？」

E 児 「いいよ」

ケヤキステージ



M 児はレストランの方へ走り出した。

つき組テラス

ほし組テラス

I 児 「まー一ぜて」

D 児 「いーいよ」

E 児 「I 児くんが入ったら、ちょうどになるね」

E 児はうれしそうに言った。R 児、J 児、F 児はそれぞれうなずいたり、「いいよ」と答えたりした。それを見た I 児は

I 児 「おれ、どこに入れていい」

と友達の思いを確かめながら、遊びに加わっていった。

### (1) I 児の自己表現のあり方

#### ○遊びに加わるタイミングをよみとるための表現

朝のつどいの後、I 児は砂遊びをしようと決めて園庭に出て行ったが、なかなか遊ぶきっかけがつかめないようだった。普段は砂遊びをしていた友達は築山から「とい」をつなぐのに夢中で、I 児と砂遊びをする仲間が少なかったことが原因として考えられる。しかも、前日に休んでいた I 児は「とい」をつなぐ遊びにどのようにして加わっていいのか、わからなかったと思われる。それに対して、リレーは運動会で経験したこともあり、I 児にとっては遊びに加わることに抵抗が少なかった。しかも、リレーをしている場には教師がいたため、遊びに加わろうと思ったのだと考える。

I 児は砂場からリレーの様子をうかがいながら、少しずつ近づいてきた。また、ケヤキステージより、相談している友達の話をよく聞いていた。これらの行動から I 児がリレー遊びの場に加わるタイミングをその場の状況からよみとろうとしていたことが考えられる。



## (2) I児の社会的側面の学んだこと

### ○友達の思いや場の状況を読み取ると遊びにまぜてもらえること

これまでI児は後から遊びにまぜてもらう時には自分から言い出せずにいた。しかし、本事例では自分がいた場所からリレー遊びをしている場まで、少しずつ距離を縮め、友達の会話に耳を傾けていた。リレー遊びをしている友達が一人ぬけること、それによって2回走る人が必要であることが理解できた。だから、タイミングよく声をかけ、すんなり遊びにまぜてもらうことができたのだと考える。

## (3) 今後に向けて

遊びに加わったI児は「おれ、どこに入ればいい」とみんなに決定を委ねている。この言葉を吟味すると、後から遊びに加わる者としての立場を理解しているということもいえるが、いまいち自信がもてないI児の心を反映しているとも感じとれる。遊びに加わった時「どんなチーム分けにする？」と遊びをリードしていくような表現の仕方も考えられる。しかし、そのようにできないI児が自信をもって気持ちを表現できるように援助していきたい。

### 事例4 『・・・おれも弱いところある』

11月19日(月)

おばけやしきでおばけになっていたI児、H児が思いのくい違いから、トラブルになった。初めは言い合いだったが、その後、蹴る、叩くという行為にまで発展していった。H児は泣いており、保育室から出て行こうとした。そっと戸を閉めて出ていこうとしているH児と目が合った。

教師 「H児くん、先生が見つけられないところへは行かないでね」

H児 「いいもん」

教師 「先生は困る。だって、あなたに何かあったらすぐに助けられないでしょ」

H児は「困らない」、「いいもんね」などと言いながら、保育室に戻ってきた。教師の側にいたI児はその様子を見ながら、立っている。

教師 「I児くんはずっとこの場所から動いていないよ。あなたと話をしたいと思っているのかもしれないよ。もう一度、話をしてみたら」

H児はI児と向かい合って座った。そこへI児が教師に「H児くん、どうしたの」と言って、近づいてきた。

教師 「先生もよくわからないから、二人の話を聞こうと思ってるの」

そう答えると T 児は H 児の隣に座った。その後、教師は他の幼児に呼ばれ、しばらくその場を離れたため途中から二人の話を聞くこととなった。

I 児 「H 児、弱い！」

H 児 「おれ、強いもん。I 児ちゃんは弱い」

I 児 「おれ、強い！！H 児、弱い！」

H 児 「おれ、強いし。I 児ちゃんは弱い！」

I 児 「おれ、強い！！」

H 児 「おれの方が強いし。I 児ちゃんは弱い！」

自分は強くて、相手は弱いと言ひ合うばかりである。

教師 「なぜ、自分が強いと思うの？」

I 児 「空手習っているから」

H 児 「じゃ、空手ならっていない人はみんな弱いのか？L 児とか（弱いのか）」

I 児は答えに困っている。そこへ B 児がへらへら笑いながらやってきて、I 児の隣に座った。

H 児 「B 児、出て行け！俺ら真剣に話しとるから」

I 児の顔を見て真剣なことを確かめると、B 児の表情が変わった。

T 児 「H 児くんだって、強いよね」

T 児が唐突に言った。

H 児 「俺、強いけど、逃げたし弱いかもしれない」

教師 「叩いたり、蹴ったりする力は強いけど、弱いところもあるってことね。自分のことをよく知っているのね」

T 児 「I 児ちゃんに、弱いところはないのかな？」

B 児 「I 児ちゃんは空手習つとるから、強い」

I 児 「・・・俺も弱いところある。だって、先に手を出したもん」

教師 「あなたも自分のことをよく知ってるのね。手を出す前にもう少し我慢したらよかったと思ってるの？」

I 児はうなずいた。T 児が「でも、我慢ばかりできないよね」と言うと、4 人は互いにうなずいたり、そうだというような表情をしておばけやしきの方へ行った。

### (1) I 児の自己表現のあり方

#### ○自分の思いを十分に表現できないでいる表現

年長児は 11 月の月上旬に 2 週間限定で「ドキドキスーパーランド」をつくった。I 児と H 児は同じおばけやしきをつくる仲間であった。その間、何回も思いの違いからトラブルが生じ、話し合っ解決しようとしてきた。だが、I 児は保育室から出て行こうとした H 児に声をかけられず、動きだせない。このように立ちつくしている姿から I 児は他者に対して自分の思いをまだ十分に表現できないでいると思われる。

#### ○自分自身を支えるための表現

I 児にとって自信がもてることの 1 つが空手である。だから、「強い」という彼の表現には、パンチをしたり、キックをしたりする力が強いということが示されている。そのことによって、自信のない自分を支えているといえる。

#### ○自分の内面と向き合った表現

I 児は年中から仲良しの B 児が側にいて、しかも「空手習つとるから強い」と自分の存在を認めてくれたので弱さと向き合えたのだと思われる。また、ともにおばけやしきをつくってきた H 児が先に弱さをさらけだしたことによって、自分もしっかり自分自身の弱さと向き合わなければならないという思いに至ったのだろう。

### (2) I 児の社会的側面の学んだこと

#### ○時には心と行動が一致しないことがあること

I 児は叩いたり、蹴ったりすることはよくないということはこれまでの経験からとてもよく理解している。しかし、本事例では我慢できずに友達を叩いてしまった。このようにいけないことだとわかっているにもかかわらず、時には裏腹な行動をしてしまうのが人間である。トラブルから逃げることはよくないと理解しているにもかかわらず、逃げてしまった H 児も然りである。I 児にとって、H 児を客観的に見つめることで心と行動は一致しないこともあるということ学んだのではないと思われる。

### (3) 今後に向けて

I 児は少しずつ自分の弱さと向き合えるようになってきている。それは仲間の存在が大きい。今後も I 児と真剣に向き合っ、忌憚なく思いを言い合える仲間づくりをしていきたい。

I児、J児、O児、P児が追いかけてっこをして遊びだした。I児は喜んでJ児、O児、P児を追いかけている。そこへ着替え終わったE児、F児、次いでQ児も加わった。男の子3人、女の子3人になった時、

I児 「ケイドロしようぜ。おれらケイ(けいさつ)、おまえらドロ(どろぼう)な？」

言い終わるか、終わらないかのうちに、女の子3人が逃げだした。

I児 「待てー」

ほし組、つき組、テラス、プレイルームを駆けまわっている。その様子を見ていたB児、U児、M児、V児、W児、X児、Y児、Z児が次々に「まーぜーて」と言って、遊びに加わりだした。I児に「ケイ、ドロどっちになったらいい？」と尋ねている。

H児 「まーぜーて、どっちになればいい？」

I児 「H児、ケイな。・・・あーわからんくなってきた」

I児はケイドロをしている友達みんなをつき組に集めてきた。

I児 「ケイしたい人、こっち。ケイ、並べ！」

すると、けいさつをしたい幼児らはI児が言った通りに1列に並んだ。

I児 「1、2、3、4・・・」

と数え、その後にどろぼうの人数を数えた。

だいたいけいさつとどろぼうの人数が同じになると、みんなに「始めよう」と言って遊びだした。

## (1) I児の自己表現のあり方

### ○遊びの責任を自覚した表現

本事例の遊び「けいどろ」につながる追いかっこをしていたのがI児とJ児、P児、O児だった。このように遊びはじめたのがI児だったので、I児には自分で遊びを進めているという実感があったと思われる。また、後から「けいどろ」に加わってくる友達がI児に遊びにまぜてほしいということを伝えたり、警察と泥棒の役割のどちらをするべきかを尋ねたりしているのも自分が遊びのリーダーであることを自覚させたとも言える。だから「ケイしたい人、こっち。ケイ、並べ!」と遊びを整理するような表現をしたのだと考える。

## (2) I児の社会的側面の学んだこと

### ○たくさんの友達と遊ぶと楽しい

I児はしたい遊びの時に自分から遊びに入ることは得意ではない。また、大勢の友達というより、3人くらいの小人数で遊ぶことが多い。本事例では自分がリーダーになり、クラス関係なくたくさんの友達が集まって遊ぶことになった。きっとたくさんの友達で遊ぶことは楽しいと実感できたのではないかと思う。

### ○遊び（逃げるものと追うもの）はバランスが大切だということ

これまでいろいろなおにごっこを経験してきて、I児は楽しく遊び続けるには逃げるものと追いかけるものが同じくらい的人数である方がよいことを学んできている。本事例ではケイドロを行っているうちにI児が人数のバランスに気づいた。それは次から次へと遊びに加わってくる友達が「警察と泥棒のどちらの役割をするか」I児に尋ねたため、彼自身が混乱し、そのことが学びを促すことになったと思われる。

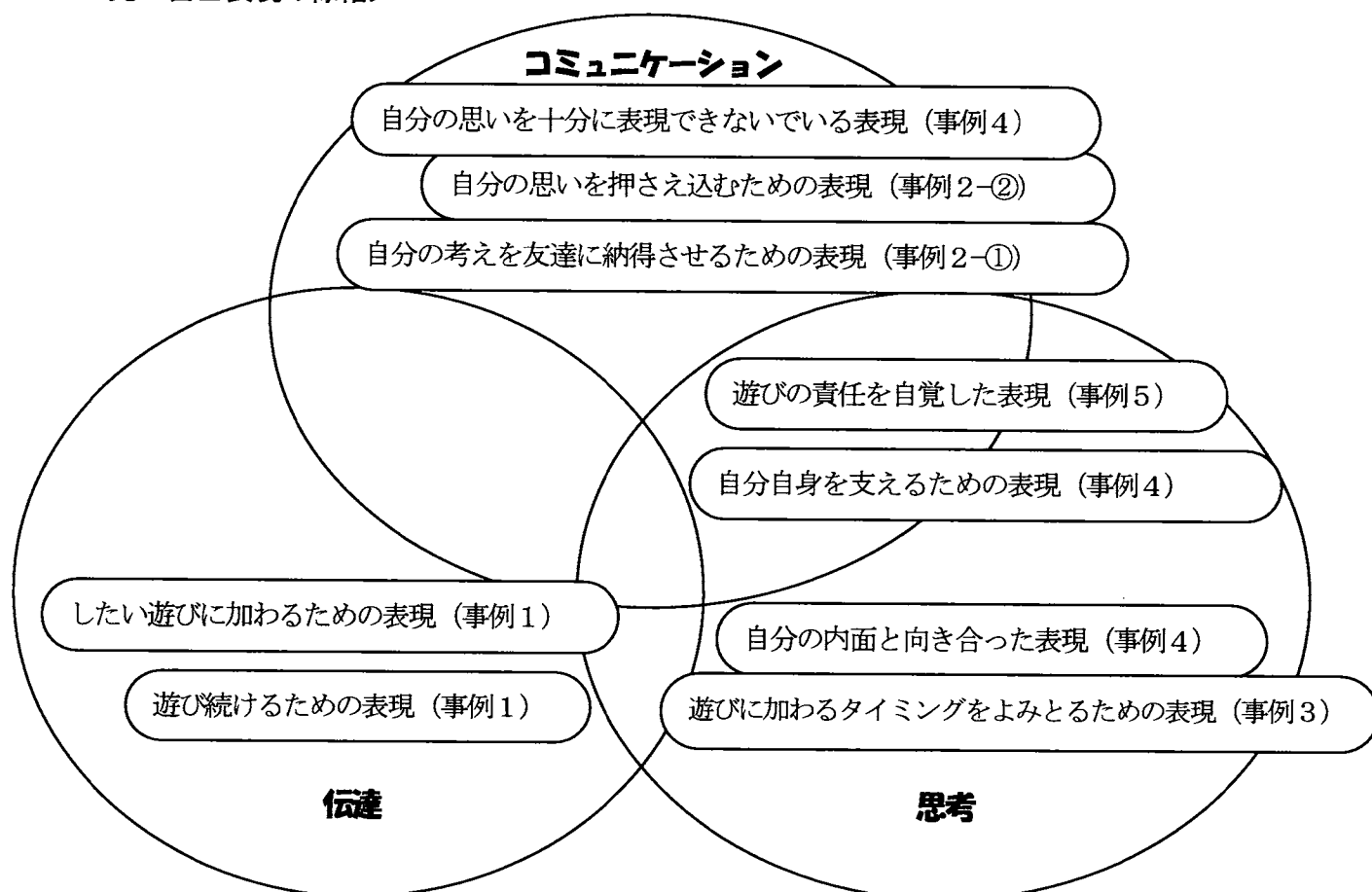
## (3) 今後に向けて

この遊びでI児がしきりはじめにだれを泥棒としたのか、しかも泥棒になる幼児はいつも固定しているのか、公平さに留意しながら遊びを見守っていく必要がある。

## ～ 一年を振り返って ～

事例を検証する中で、一人一人の自己表現のあり方が、「伝達」「コミュニケーション」「思考」の3つに分けられるのではないかと考えた。I 児の自己表現のあり方から見えてきたキーワードをその3つに分類して位置づけ、その図及び各事例より見えてきたことを考察する。

### < I 児の自己表現の様相 >



### ○考 察

I 児はもともと友達とかかわりたい気持ちが強い幼児である。しかし、友達とのかかわり方が不器用なため、その思いがなかなか伝わらずに苦心していた。1学期、I 児は友達との関係を上手く築けない自分に自信がもてず、したい遊びに加わることに遠慮しがちな様子だった。そこで、教師を仲立ちとしながらもI 児が思いを伝え、自分に対する自信を取り戻すことができるようにと願い、かかわった。それによって、I 児は本来の自信を取り戻し、安心してサッカー遊びに加わったり、自分の考えを話すことができるようになった。

2学期はこれまでの経験をいかして、友達とコミュニケーションしようという姿勢が見られるようになった。教師がI 児の思いを代弁しなくても、I 児自身が遊びの場の状況をよみとってタイミングよく遊びに加わることができるようになった。友達と遊ぶようになったからこそ、トラブルも多くなってきたが、それをきっかけにI 児は自分の行動を振り返ることができるようになり、友達関係が深まった。

3学期は安定した友達関係の中で、遊びのリーダーとなっている姿が見られた。そこでは遊びを自ら整理するような言葉が何回も聞こえた。I 児は友達から頼られる経験を通して、遊びに対する責任を自覚したと思われる。さらに友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わったといえる。